

---

# 凄腕ハンター千雨

川岸新兔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

凄腕ハンター千雨

### 【Nコード】

N2233Z

### 【作者名】

川岸新兎

### 【あらすじ】

【ネギま×MHP3】

千雨チートSSを書きたくなったので本能の赴くまま書いたものです。

無論チート成分を含んでおりますので、嫌いな方はクエストリタイアしてください。

P3限定なのはそれしかプレイしてないため。  
Arcadiaにも投げる。

## 第1クエスト

霊峰。ユクモ地方の渓流奥地に存在するその場所に、千雨という一人のハンターが立っていた。

空は相変わらず青く晴れていて、心地よい風が千雨の髪を揺らしている。今日は珍しく雲一つ見つけれなかった。

「やっぱり、見間違いだったんじゃニヤいかニヤ？」

隣で双眼鏡を覗き込んでいた相棒の言葉に同意する。

「だろうな。そもそもアマツマガツチみたいなのが何匹もいたら、ここら一带に人間なんか住めないだろ」

ギルドで聞いた、空を飛ぶ古龍らしき影の目撃情報。その確認をする為に千雨達は三日も前からこの場所でそれらしき存在を探していた。

「だったら、ニヤんで千雨はここから動かニヤいニヤ？ もともとは一泊くらい調査するだけの予定だったニヤ」

ジト目でこちらを見る相棒。千雨はそちらを見ることなく答える。

「見られてんだよ。アマツマガツチじゃねーな。ヤバそうな奴がずつとこつちを観察してやがる」

「ど、どつちニヤー!？」

慌てて相棒が双眼鏡を構える。千雨はスツと前方を指さす。

「向こうの姿は確認できない。気が付いたのは、まあ勘だ」

「うー……。千雨の勘って当たりすぎるから怖いニヤ。逃げ隠れたナルガクルガー一発で見つけるし。小っちゃい頃はかくれんぼで負けっぱなしだったニヤ……」

千雨はぶつぶつ呟く相棒を気にせず、くるりと踵を返してベースキャンプに戻る。

「あれ、何をするニヤ？」

「予備の食糧も無くなるしな、ここはひとまず」

千雨はささっと荷物をまとめて背負う。

「 帰る。お前も荷物まとめるよ」

「でもあつちにいるヤバそうなのはどうするニヤ？」

「一応誘ってみたけど反応しないし、遠すぎて何もできねーよ。まあ、ギルドに報告するけどな」

とはいっても千雨の勘が正しければ、相手はアマツマガツチ以上。そしてこの近辺で古龍討伐経験のあるハンターは千雨達だけ。何か起きるとするならば千雨達が動くことになる。

古龍撃退経験のあるモガの村の英雄や、峯山龍狩りで知り合った凄腕のハンター達に連絡を入れるべきか。あるいは別の大陸とやらから人材を集めて貰う必要があるかもしれない。

「あれ、アルバトリオンとやらなのかなあ」

いるかどうか分からない古龍の名前を出してみたが、どうにもしっくりこない。未知の古龍だろうか。あるいは……。

「神様、かも」

直後、世界がいきなり変わった。

空は昏くなり、風は生ぬるく頬を撫でた。アマツマガツチすら遠く及ばない、絶対的な何かが完全にこちらを捉えている。

「……それでも目視出来ねー」

「千雨、完璧ヤバイニヤ」

「わーってる」

愛用の王牙刀【伏雷】を抜き放ち、構える。相手は斬れるかどうか分からないが、気持ちで負けるつもりはない。斬ると自分の中で決める。

「ッ！ 来る！」

勘が危険を訴える。相棒を掴み、大きく跳躍し、思い出したように太刀を振るう。切っ先が何かに掠った気がした。

「……！」

激震。空中にできるはずがない亀裂が生まれた。中は闇より黒く、亀裂は千雨達の落下先にも伸びて来る。

落ちる。そう理解した千雨は、相棒だけでも逃がそうと、彼を掴

んだ腕を振りかぶり、見た。

彼は逆に千雨を投げようと、その小さな体を必死に動かしていた。

「！！！」

千雨は相棒の名を叫び、投げる。

しかし、我を忘れた時間が長く、二人は空中の裂け目に落ちた後、投げられた彼の体はわずかに裂け目から出て、また入る。

千雨は最後まで彼女の腕を掴む小さな手を離さそうとしなかった相棒を見て、泣いた。

幼いころから一緒だった相棒を助けられなかった。悔しさで頭がどうにかなりそうだった。彼の小さな体に手を伸ばし、思う。

（死にたくねえっ！）

長谷川千雨は、駅のホームで電車を待っていた。今日から新学期、中学三年生となる。

あと一年もあの子供先生が担任だと思つと、憂鬱になる。深くため息をついて、周りの生徒たちから怪訝な目を向けられる。

電車が駅に進入することを告げるアナウンスが流れる。

「ん？」

誰かに呼ばれた、様な気がした。後ろを振り向いたが、誰も呼んではいなかった。ストレスで頭がいかれたのだろうか、また憂鬱になった。

電車がやってきたのが見えたので、前を向いたら、急に姿勢が崩れた。

「あ？」

体が落ちる。電車の運転手が慌てているのが見えた。落下地点はおそらくレールの上。減速しているとはいえ、車輪に巻き込まれたら死ぬだろう。

走馬灯のように思い出が脳裏を駆け巡る。悲鳴が聞こえた。五月

蠅い、死にそうなのはこつちだ。

（死にたくねえっ！）

視界が急にクリアになる。手に持っているのは記憶に無い愛刀と見覚えの無い相棒。太刀は捨てても問題ないが、猫の様なおかしな生物は手放せない。

彼を抱え込むように腕を動かした。体勢が変わったおかげで脚が巨大な塊の方向を向く。好都合だ。そのまま電車を蹴って、跳躍。とつさの回避行動は成功し、ようやく止まった電車から離れたレールの上に着地する。

周囲がどよめく。

「君！ 大丈夫かい!？」

駅員の叫び声が聞こえる。返事をしようとして、自分が何と何を両手に持っているか思い出す。どちらも調べられたら拙い。

「ごめんなさいっ!」

脱兎のごとく走り出す。幸い、追いつかれることなく逃げ切れた。

「はー、はー、はー。くそ、この距離は、強走薬、無いと、キツイな。はー」

ようやく人がいないところに来れたので、手に持っていた相棒を下ろして座り込む。

相棒のお腹が、膨らんで、元に戻ったのを確認できた。

「……よかった。生きてた」

涙がこみ上げてくる。あのわけのわからない現象から帰還できた

ことを、泣いて喜んだ。

ひとしきり泣いた後、ふと気が付く。

二つの人生を歩んだ記憶がある。

一つは、この平和な日本で生まれ育った女子中学生の千雨の記憶。

一つは、ユクモ村に住んでいる超一流のハンターである千雨の記憶。

服装は、女子中学生の物。体は、ハンターの物。精神は、よく分らない。

「なんだよこれ、異世界トリップに分類していいのか？」

千雨の疑問に答える者はいなかった。

## 第2クエスト

千雨は幼いころに両親を亡くしている。あまりに幼すぎて両親の顔どころか、住む村がティガレックスに襲われて壊滅し、一人だけ生き残った事さえ覚えていない。

気が付いた時には育ての親のハンターと、彼が雇ったオトモアイルのマツコリと三人で各地を旅して生活していた。

育ての親のハンターは酷く酔っ払うと、千雨の村の人々を助けられなかったことを延々謝り続けるので、あまり酒を飲ませないようにするのは苦労した。

マツコリはよく千雨の遊び相手になってくれた。おかしな名前は雇い主が付けたものだが、マツコリ自身はその名前を気に入っていた。

転機が訪れたのは千雨が八歳になるころだったか。育ての親がティガレックスに殺された。

当時滞在していた村の者は、千雨を引き取って育てようとしてくれたが、断ってハンターとして生きることを決めた。

復讐、という気持ちが無かったかと思えば嘘になる。だが、ギルドから派遣されたハンターがティガレックスを退治するほうがどう考えても早いので、どうでもいいと言えばどうでもよかった。

ハンターになったのは強くなりたかったから。二度も自分の人生をめちゃくちゃにしたティガレックスに負けっぱなしになるのは我慢できなかった。

村の者は無謀だと千雨を止めたが、マツコリは千雨の決断に賛成してくれた。

ギルドの者も無謀だといったが、千雨はハンターとして登録してもらおうように申請を出した。

当然受理されなかったが、マツコリと共に鍛錬をして僅か二ヶ月、二人で一頭のドスジャギイを仕留めてギルドの者を黙らせた。最年

少ハンターが誕生した。

千雨達はそのまま村に滞在。マツコリはそのまま千雨のオトモになることを決め、二人で鍛錬と狩りを繰り返した。

二年後、ギルドから派遣されたハンターたちを退け続け、主とまで呼ばれるようになった育ての親の仇であるティガレックスを仕留めることに成功した。

その後、ギルドにユクモ村の常駐ハンターになることを打診され、承諾。さらに二年後、ユクモ地方に再来した古龍アマツマガツチを討ち取り、彼女達は英雄となった。

「……ニヤニヤッ！ 千雨！ 無事かニヤ！？ 何処にいるニヤ！？」

がばつと相棒のマツコリが起き上がり、辺りをパパパッと見回す。  
「こつちだ、こつち」

千雨の言葉に振り向いたマツコリは、いきなり号泣。千雨の顔に飛びついた。

「よかったニヤ！ 無事かニヤ？ 心配させないでほしいニヤ！」

「こつちのセリフだ。……目、覚まさないから心配したんだぜ」

そう言っマツコリを顔から引きはがす。

「うなー、ごめんニヤ。……あれ？ 千雨、その格好どうしたニヤ？」

さて困った。千雨も現状はよく把握できていない。どう説明したらいいものかと考え、気が付く。

「ちよつと黙っててくれ。誰か来る」

サツと植え込みに隠れて、気配を殺す。足音から無警戒な手練れと仮の判断。

息を殺し、じつと身を潜める。やってきたのは元担任の高畑・T・タカミチ。

（は？　なんで高畑があんな手練れみたいいな足音出すんだ？　いや、デスメガネとか言われてるからそうおかしくはないのか？）

それにしても練度が違う。彼の足音は戦士のそれにしかきこえない。只の教師があんな歩き方をするものか。

「おかしいな、目撃情報からすると、このあたりなんだが……」

目撃情報とは、なんだろうか。そう考えて、駅で鮮やかに電車を回避したことを思い出した。探しているのは恐らく千雨だ。

そう考えたところで、高畑がこちらを見る。

（気づかれた！）

視線は合っていないが、間違いないだろう。雰囲気の変化した。とっさに両手のマツコリと王牙刀【伏雷】を放して立ち上がる。

「は、長谷川君？　なんでこんな」

急に現れたことに驚いたのか、間抜けな声を出す高畑。

「いやあ、実はこの辺で落とし物をして探してたんです。もう見つけたんで手伝ってくれる必要はないですよ！　じゃあそういうことで」

一気にまくし立てて、マツコリと太刀を掴んで、逃げる。

後には、ぼかんとした高畑が残された。

結局走って学校近くまで来てしまった。普通は電車を使う必要があることを考えると驚異的だ。

「あつぶねー。ばれるところだった」

そう言ってから、ふと思う。王牙刀【伏雷】は完璧に危険物なので所持がばれるとまずいが、この麻帆良でアイルーという訳わからん生物が見つかった所で、何か追及されるだろうか？

世界樹なんて物が許容されているので、うわー、すごいで終わり

そんな気がする。それはそれでなんか頭が痛くなりそうだった。

「千雨。いい加減放してほしいニヤ」

「あ、わりい」

地面に降りたマツコリは体をブルブルと振わせて、千雨を見る。

「いい加減どういう状態なのか教えてほしいニヤ。見たこともないものばかりで頭が破裂しそうニヤ」

「私も何がどういう状態なのか分からねーんだよ。ちょっと考える時間をくれ。……そうだな、これ隠して夕方までこの辺で待っててくれ。用事も入ってるんだ」

放課後まで考えていれば何とか状況の把握はできるだろう。太刀をマツコリに渡して。注意事項を説明する。人の言葉で喋らないこと。人間に二足歩行しているところを見られないように注意すること。

「ウニヤ。しょうがないニヤ。その代わりにちゃんと説明してもらおうニヤ」

マツコリは王牙刀【伏雷】を持って隠せそうな場所を探す。

千雨はため息をついて校舎に向かった。

なぜ気が付かなかったのだろう。いや、気が付くはずがない。何せ今までこいつらを見ていたのはただの女子中学生だったのだから。三年A組の教室に入って感じたのは、以前よりずっと強い違和感であった。

長瀬と桜咲と龍宮と古菲はなんか強い。強いのは分かっていたが、千雨の歩き方に違和感を感じているようだ。中でも桜咲と龍宮はなんか変な感じがする。

ザジとエヴァンジェリンは、よく分からない。龍宮の変な感じをより強くしたような違和感を感じる。

絡繰は、前からわかっていたがロボットだ。生物の気配を感じな

い。朝倉の左側の空いている席から感じる何かの方が生物っぽい。

あと、ネギ先生と近衛の気配はなんか濃い。

「長谷川さん、ちょっと遅かったけど何かあったんですか？」

「ちよつと事故っぽい何かに巻き込まれていた様な感じですよ。怪我はないので心配はいりませんのであしからず」

まくし立てて、子供教師からの追及を逃れようとする。

「事、事故ですか！　そう言えば今日電車事故みたいなこと」

「それとは別です。何にも関係ありません」

実際は自己にあった当人のだが、追及されると困る。

何とか追い払って、席に着いた。

「大丈夫なのですか？」

「綾瀬、むしろいつもよりも無茶苦茶健康だから気にするな」

「はあ……」

そしてチャイムが鳴る。始まった馬鹿騒ぎに千雨はため息をついた。

何とか学校にいる間に纏めた話をマツコリに聞かせる。

ここは、人間の文明が発展し、モンスターや獣人のような存在がない世界であること。

目の前にいるのが、こちら側にいた長谷川千雨という少女と、マツコリの知るハンターの千雨が融合したような存在であること。

どうしてこちらに来たのかはよく分かっていないこと。帰る手段は不明なこと。そもそも千雨同士の融合が解けるのかわからないこと。

一通り話を聞いたマツコリは、深くうなずいて言った。

「まあ、何も知らないで放り出されたよりましな状態であることは理解したニヤ」

「取り乱さないんだな」

千雨の言葉に不思議そうに首をかしげるマツコリ。

「取り乱したところでどうにもならないニヤ。旦那さんが死んだときだって千雨もそう言ったニヤ」

「あー、そうだな。……帰りたくはないのか？」

「飯に向こうに戻っても千雨がいらないんじゃないニヤ。まあ、ユクモ村がちょっと心配なだけニヤ」

顔を合わせる二人。ニヤリと笑いあつて、立ち上がった。

「うし、じゃあこっちの私の住処に帰るとするか」

そう言った直後、千雨は一瞬で現れた気配に向かつて振り向く。

「その前に、僕にもいろいろと話を聞かせてもらえないかな？」

そこには、高畑・T・タカミチが、手をポケットに入れたまま立っていた。

### 第3クエスト

どうしたものか、千雨は考える。

ハンターの自分の知覚を超えて出現した高畑に驚いて、思いつきリミドルキックを叩き込んでしまった。

鮮やかな放物線を描いて飛んで行った高畑は頭から地面に激突。気絶していた。

ジャギイくらいなら一発で仕留められる千雨の渾身の蹴りを食らっても骨折せずにいるから、理不尽なまでに頑丈だ。

放つておいても起き上がりそうな人種のようにだがそのままというわけにもいくまい。第一、目覚めたらまた千雨の話聞きに来るだろう。死人に口無し作戦は道徳上の理由で却下。

「……人間相手にやりすぎニヤ」  
マッコリの言葉が耳に痛かった。

「とりあえず、保健室に運ぼう」  
気絶した成人男性を女子中学生が脇に抱えて運ぶ光景は、なかなかシニールだった。

「すみませんでした」

「……いや、いいよ。最初逃げられたからって驚かせようとした僕も悪かった」

「そうですね。ではおあいこという事で」  
間違っても危害を加えた人間が言うセリフではない。首を固定され、まだ痛む腹を擦る高畑は顔をひきつらせた。

「ところで、彼は何処だい？」

恐らく会話は聞いていたのだろう。隠す気もなくマッコリの居場所を尋ねる高畑。

「彼、とは？」

盗み聞きしていた相手なので容赦なくすつとぼけてみる千雨。

「ほら、マツコリという猫妖精みたいな、……アイルーといったかな？」

ケット・シー、という言葉が自然に使う高畑。違和感を覚えた千雨は率直に聞く。

「高畑先生は、魔法使いか何かですか？」

「……ああ、うん。そんなようなものだよ」

千雨は愕然とした。まさかそんな非常識な存在があるとは。異世界とか人体融合とか魔法とか、もうめちゃくちゃだ。

「ああ、もう常識ってなんなんだろう？」

くずおれる千雨を見てマツコリが窓から飛び込んできた。

「ちよつと、何したニヤ！ 千雨がこうまで落ち込むなんてそうそくないニヤ！」

怒るマツコリを見て、高畑は遠くに目をやって、ぼそつと言った。「ただの蹴りで僕を気絶させた長谷川君に、常識とか言われたくないなあ……」

どうやら魔法使いから見ても千雨は規格外らしい。憂鬱だ。

寮に帰る道すがら、千雨は高畑から話を聞いていた。

魔法の存在は秘匿されるもので、違反するとオコジョにされたり、記憶を消されるらしい。

わざわざ言いふらす気はないので、千雨には関係ないだろうと思っっていたら、高畑は言った。

「僕としては魔法生徒になることを勧めたいんだけどね」

「いやいや、私魔法とか使えないですよ」

話をよく聞くと、魔法のように秘匿された技術に気の使用、というものがあるらしい。

千雨達の近くに一瞬で現れたり、蹴りを食らっても死ななかつた  
りしたのはそういう方面の技術なのだそうだ。

油断していたとはいえ、身体強化していた高畑を昏倒させるダメ  
ージを与えた千雨を野放しにはできない様だ。

「気。そう言われて千雨の脳裏に一つ思い浮かぶものがあった。

「アニメとかでよく見る、こう構えて、覇ッ！」

轟ッ！

強く輝く光の塊が放たれる。尾を引いて飛んで行った気弾を見て  
呆然とした千雨の肩に手を当てて高畑は言った。

「……………さあ、長谷川君。君は魔法生徒にならないと」

ああ、人生ってままならない。気を放った両手を見つめ、千雨は  
涙した。

「ふふふ、だがまあ、坊やがまだパートナーを見つをぶろっつ！」

「マスター！ 一体どこから攻撃が!？」

千雨の放った気弾はエヴァンジェリンに当たった。

ドナドナを脳内で流しながら、千雨は高畑についていく。

「そう悲観するものじゃないよ。魔法生徒だからって、普段は特に  
何かしると強制されるわけではないからね。まあ、危ないことをし

なければ籍を置くだけでもいい」

うん、しょうがない。向こうでも無登録ハンターとかは取り締まられていたりしたのだから。組織とつながりを持つのは悪いことじゃない。ギルドと同じ様なものだ。

そう考えた千雨の脳裏にある可能性が浮かび上がる。

「あの、もしかして武器の所有とか認められますか？」

「うん？ そうだね、管理をきちんとしていれば認められるよ」

購入するルートも教えてくれたりするか。おお、いいじゃないか。魔法生徒登録。もしかしたら罾とか薬系統とか爆薬とか防具とかも手に入るかもしれない。そこまで考えてふと気が付く。

「こつち、狩猟できるような飛竜とかいないじゃないか。どうやって稼げばいいんだ？」

膨らんだ期待は瞬く間にしぼんだ。

「せ、生活費はどうにかなるかニヤ？」

相棒をなでつつ、千雨は泣きながら何とか立ち上がった。

「マツコリ、お前は私が守るよ」

「千雨！」

抱きしめあう二人。

高畑はいたって普通だった千雨の変わりように、彼女が元の生活に戻るのか不安になった。

## 第4クエスト

「おい、長谷川千雨」

始業前。いきなりエヴァンジェリンに話しかけられた。

「なんだ」

「ちよつと来い」

昨晚、魔法関係者の基礎知識的なものを教えられて少々疲れていた千雨。まあ三、四日寝ないで活動することもできるが、休めるもんなら休むのが基本だ。雰囲気ここで話してほしいと訴える。

立ち上がらない千雨に、舌打ちしたエヴァンジェリンが唇だけを動かす。

（魔法関係だ）

さつそくなにか面倒なことになりそうだ。魔法生徒として登録したのは間違いだったか。そんなことを考えて千雨は席を立つ。

エヴァンジェリンにつれてこられたのは屋上。畏らしきものは感じ取れない。絡繰もついてきたが、そんなことはどうでもいい。

「あれか、新入りのくせに挨拶に来ないのは生意気だつて話？」

「違う！ 昨晚の件だ。貴様いつたいうつもりだ」

昨晚、といわれて困惑する千雨。ちよつとした座学に気の使い方  
の軽い特訓をただけだ。間違つてもこのちみっこい同級生に因縁  
つけられる記憶はない。

「貴様、私を狙って気弾を放ってきたらう。私が『闇の福音』だ  
という事を知らんのか」

「二つ名を自称するのは、……もうちよつと貫禄出てからにした方  
が良いと思う」

流石にイタいとは言えなかった。

「貴様ツ！ いいか、この異名は私を狙ってきた馬鹿共を蹴散らした  
結果、恐怖した人間どもが付けたものだ！」

怒り出した。正直そんなことはどうでもいい。

「……とりあえず、すまん。そんなことは知らんし、気弾だったぶん只の流れ弾だ。怪我とか、ないか？」

「真祖の吸血鬼をなめているのか！」

そう言われても知らないものは知らないし、心配したのに怒られた。理不尽なものを感じる。

「魔法関係は昨日知ったとこなんだよ。正直お前が有名人だったとしても誰それ状態なんだ」

ぼかんとするエヴァンジェリン。

「あれほどの威力の気弾を撃っておきながら、昨日裏の世界を知ったばかり？ 嘘もたいがいにしる」

「いろいろ事情があるんだよ」

何度も説明したくはない。自分だってよく分かっていないのだから。

「ところで、吸血鬼だった？ 日光とか大丈夫なのか？」

「お前、本当に知らんのか？」

最初から知らないと言っているだろうに、なんて疑り深いのだろう。

「私は太陽を克服した吸血鬼だ。……怖くはないのか」

「いんや。お話通りに不死身なら殺り合う時面倒だなー、くらいかなあ。生きた人間をバリボリ食うわけでもねーし」

「人間をバリボリ……」

「魔法の世界があるんだってな。そっちじゃ魔獣とかドラゴンが食ったりするだろ？」

エヴァンジェリンが頭を抱えてぶつぶつ独り言を言いだした。その様子を見て、こっちの竜種は人を襲ったりしないのだろうかと考える千雨。

「あ、そろそろ始業だ。エヴァンジェリン、絡繰、教室に戻るぞ」

「あ、ハイ。しかしマスターが……」

「あー、そういえばコイツよくサボるよな。サボりたいなら好きにしてくれ」

おろおろとする絡繰と、ぶつぶつぶやくエヴァンジェリンを置いて、千雨は階段を下りて行った。

「そついや怪我の具合とか結局聞いてなかったな。後でなんかジュースでも奢るかな」

「は、長谷川さん。エヴァンジェリンさんに呼び出されたって本当ですか？」

「はい。ちよつと怪我させちゃったみたいで……」

「え、エヴァンジェリンさんが怪我!？」

そう言えばこの先生の持つ木の棒、どう見ても杖である。これに乗って空飛んだりするんだろうか。

「うなー、なあ、ふにゃーお」

幸いにしてこちらでも言葉は通じた。あまり頭がいいとは言えない者達だから返事が片言で返ってくるのはつらいのだが、仕方あるまい。

マツコリは女子寮近くの猫たちを纏め上げていた。その影響力は絶大。瞬く間に三つのエリアを統括するボス猫として君臨。この分だとまだまだ配下の猫は増えそうだ。

「ほんとはアイルーなんだけどニャア」

側近の猫が慌てた様子で駆け寄ってくる。元ボスの一匹だ。

「にゃあ、なー、しゃー。うなう」

「なう。……ヤバそうなネズミってどんなやつニャ？ まあ、見ればわかるかニャ」

よつと立ち上がるマツコリ。なおー、なおーと新たなボスを称える猫たち。元ボスの猫が一声鳴いて、マツコリを導く。

「ドスジャギイも頑張つて群れを纏めてたのかニャア？」

まあ、考えても仕方のないことだ。マツコリはネズミをどう料理

するか、頭の中で作戦を立て始める。

学園長室のドアがノックされる。

「何じゃ？」

「失礼するニヤ」

入ってきたのはマツコリ。手には紐でぐるぐる巻きにした何かを持っていた。

「おや、マツコリ君だったかの。なんじゃねそれは」

「いやいや、それを訊くのはこっちだニヤ」

「はい、と学園長の前に何かを下ろす。」

「これは、オコジヨ妖精？」

「そーいう生き物なのかニヤ。言葉をしゃべる動物は魔法関係らしいって聞いたから持ってきたニヤ。ここで飼ってる生物かニヤ？」

はてと首をかしげる学園長。

「オコジヨ妖精を連れている先生も生徒もいなかったはずじゃが」

「ニヤア。じゃあ、侵入者ニヤ。尋問とかはそっちに任せるニヤ。」

「一応薬で眠らせたから、目が覚めるまで後五分くらいかかるニヤ」

そう言っ後始末を丸投げしたマツコリ。とっそこ四足歩行で外に出て行った。

「……まあ、まずは事情を訊いてみるかのう」

オコジヨ妖精、アルベール・カモミールは猫に対して深いトラウマを抱えることになった。

逃げ道を一つ一つ塞がれていく恐怖は相当なものだったようだ。

## 第5クエスト

「ぼ、僕のパートナーになっしてくれませんか！」

「断る」

がーん。千雨にはそんな音が聞こえたような気がした。

「ま、待ってください！　せめて事情だけでも聞いてくれませんか！？」

夜にいきなり千雨の部屋までやってきてパートナーになっしてくれというガキンチョ。閉めようとしたドアに手をかけてなおも騒ぎ出す。

「あー、わかりました。聞くだけは聞いてみるので、とりあえず騒がないでください」

「あ、ありがとうございます！」

仕方なく部屋に入れるが、恋人探しにどうしてここまで切羽詰まっているのだろうか。後からさっきの声を聞いた乱入者が来ないように鍵をかけて、奥に進む。

「なー」

マツコリは猫のふりモードに移行した。

「て、てめえはあの時の猫妖精！　なんでここに！」

「カモ君！」

どこかから聞こえてくる声。どうやらまたも魔法関係の厄介ことのようにだ。

「アイルーだニヤ。そう言うお前は侵入者のネズミじゃニヤいかニヤ」

「ひッ、く、来るな！　噛むぞコラ！　あ、兄貴助けてくれ！」

「ネズミにかまれたところで痛くも痒くもないニヤ。なんで解放されてるニヤ？」

動物たちの会話にネギは困惑。

「ち、千雨さんも魔法関係者なんですか？」

「誠に遺憾ながら」  
ギャーギャー騒ぐ動物と沈黙する子供先生。千雨的には早く追い出したくなった。

「エヴァンジェリンを何とかしてほしい？」

「は、はい。申し訳ないんですけど」

「断る」

「千雨さんっ!？」

ちなみに千雨はいつの間にか呼び方が下の名前になってる事に、今気が付いた。

「怖い先輩をこれ以上怒らせたくないし」

「ちよつと千雨の姉さん、あんまりだぜ」

「うっさいニヤ」

「ヒイツ!」

五月蠅いオコジョはマツコリが抑えた。睡眠薬を嗅がせて、静かになったので話を続ける。

「なんでまた、私にそんなことを頼むんですか」

「千雨さんはエヴァンジェリンさんを、真祖の吸血鬼を怪我させることが出来たんですよね？」

「あー、気弾が当たったらしいから怪我はしたでしょうね」

「え？」

話を詳しく聞くと真祖の吸血鬼は最強クラスの化け物らしい。普通の魔法使いじゃ手も足も出ないとか。古龍みたいなもんかと千雨は認識。

しかしエヴァンジェリンは魔法生徒なのだから、関東魔法協会に籍を置いているはずだ。

「高畑先生とか、学園長、他の魔法先生でもいいかもしれませんね。相談してみたらどうですか？」

「え、タカミチや学園長はいいとして、他の魔法先生？」  
「は？」

この麻帆良は関東魔法協会の本拠地で魔法使いがたくさんいて、魔法先生とか魔法生徒として活動していることを説明。

「私はこの前魔法生徒として登録されたばかりだから知らなかったけど、なんで先生が知らないんですか？」

「うう、修業中だからかなー？」

「まあ、学園長先生には報告しときますが、ちゃんと説明受けた方がいいと思いますよ。私が言うのもあれですけど」

はい、と頂垂れてしまったネギを見送って玄関のドアを閉める。

「魔法使いに存在知られてないって、ゆるゆるじゃねーか関東魔法協会。……そう言えば、麻帆良は非常識な場所だと思ってたけど、あれも魔法関係だったりするのかな」

だとしたら無茶苦茶だ。一般人の目から見てもおかしいのに放置とは。ちよつと組織の在り方について苦言を呈する必要があるのかもしれない。

学園長はエヴァンジェリンを注意しておくから、千雨にはヤバそうな状態になったらネギをそれとなく助けてほしいと依頼してきた。「報酬とかが出ますか？」

「むしろ魔法使いは『立派な魔法使い』として」  
「前も言ったけどなる気はないです。装備とか道具もお金かかりますし、報酬出るんですか？」

交渉の末、何とか悪くない条件は引き出せた。

「それにしても最強クラスの化け物が、封印されて弱体化ねえ。どうやったんだ？」

魔法とは不思議である。

そう言えばヤバい状態とはどの程度の事だろうかと考える。しば

らく考えた結果、救助隊のアイルー達が助けに来るくらいだと勝手に判断して、今日は眠ることにした。

「これも修業じゃ」

「ええ!？」

魔法先生は無理難題を吹っ掛けられた模様です。

## 第6クエスト

魔法生徒になった時に学園長に頼んだ装備が届いたので受け取りに行く千雨とマツコリ。

「よくきたのう。ちょうど今問題が発生したので連絡しようと思っていたのじゃが」

学園長の話によると、侵入者が来て、山の中に隠れてしまったので捕獲を手伝ってほしいとのこと。

「どんな奴ニヤ？」

「関西呪術教会のはぐれ者のようじゃな」

装備の状態を確かめるのにもいいだろう。報酬も出るようなので参加することにした千雨達。

「で、なんで私の防具は制服なんですか？」

「いいじゃろ？ 普段から身に着けられるからのう」

魔法の品で結構いい防具なのだとか。しかし、気で身体強化した方が防御力が上がるらしい。無駄遣いだったかもしれないと千雨は悔やんだ。

マツコリは炎の魔法剣を素振りして、具合を確かめた。一回首をかしげたのを見て、まだ慣れるには時間がかかるとみる。

「この位置にすでにほかの魔法生徒たちが向かっておる。彼女たちと合流してくれ」

さて、誰がいるのやら。

太刀とかもってウロウロしてるのを見かけられたら拙いので、屋根の上を瞬動で移動していく。

「便利なもんだよなあ。これなら強走薬なんかいらねーし、回避もずっと楽だ」

「アマツマガツチとやりあう時に知ってたなら、もっと楽に戦えたニヤ」

遠い目をして、あの時しんどかったニヤ。とつぶやくマッコリ。あれは、まあ結構な量の素材を研究機関に安く買っつけていかれたので、今後遭遇しても戦うかは微妙だ。自分の取り分が多ければ考えるが。

合流予定地に降りる。しばらくしてやってきたのは龍宮と桜咲だった。

「お前らも魔法生徒なのか」

「ええ。……長谷川さんが魔法生徒になったとは話に聞いていましたが、いざこのような場所で会うとおかしな気がします」

「んー、まあな」

「とはいえ、魔法生徒としてここにいるのは事実だ。よろしく。……足を引つ張らないようにしてくれよ？」

「善処する」

そこで、桜咲がふと、何かを不思議に思ったようだ。

「長谷川さんたちはどうやってここに？ 学園長から合流すると聞いた時には、私たちはすでに移動していたのですが」

「瞬動で屋根の上を跳んできた」「ニヤ」

マッコリと同時に答えると、何故だか二人が妙なものを見るような目をした。瞬動は移動技術じゃないのか？

「武器とかもつてうるうるしてたら、完璧不審者扱い受けるぞ。見つかからないように移動するだろ」

何故だか桜咲がシヨックを受けていた。

「どうした」

「……その辺には触れないでやってくれ」

いつもの竹刀袋をみて、納得した千雨であった。

「二時、二百」

「……ビンゴだ」

千雨は学園側の人間を把握していないので、人影を見つuckerたびに龍宮に確認してもらおう。

今回見つけた右側にいた人間は侵入者だったようだ。龍宮が銃を撃つ。

ギイン、と大きな音が立つ。どうやら魔法で防がれた模様。

「飛んだぞ！」

「チツ」

龍宮が舌打ちする。生半可な攻撃では防がれるみたいだ。

空中に逃げた侵入者に向かって、桜咲が気の斬撃を飛ばす。それを見て千雨は一つ思い浮かんだことを試してみることにした。王牙刀【伏雷】を構え、気を込める。刀身が輝き、バチバチと電気を発していく。

「即興技、飛竜斬り！」

振り抜かれた王牙刀から、轟音を立てて雷が天に昇る。雷は侵入者に直撃し、そのまま空の彼方へ消えた。

「斬撃のつもりだったけど雷撃になったのは何でだ？」

しかも威力が馬鹿みたいに高い。秘匿される技術である為、もう少し加減を覚える必要があるのは今後の課題か。

## 第7クエスト

「マツコリさん。ありがとうございます」

手早く怪我をした猫の手当てをする茶々丸。消毒液がしみたのか、猫がびくつと動く。

「にゃーにゃー、こっちが感謝する方ニヤ。正直、僕の手之余る状態だったニヤ」

茶々丸とマツコリが出会ったのは昨日の事。

始まりは、群の猫が怪我をしてしまったのでマツコリを頼ってきた事。

うる覚えの知識で四苦八苦して応急処置をしようとして上手くいかず、いよいよとっておきを使おうかという時に現れたのが茶々丸。彼女は上手く怪我の処置をして、他に怪我をした猫がないか尋ねてきた。そうして今日、マツコリは何匹か手当てが必要な猫を集めて連れてきたのだ。

「手持ちの薬を使わなくても済んで助かったニヤ。アオキノコと薬草はまだあんまり見つかってないから困ってるニヤ」

なんで蜂蜜の方がお店で簡単に手に入るのか、不思議で仕方ないマツコリ。

「アオキノコと薬草。それはいつたい何ですか？」

「知らないかニヤ？ 回復薬の材料ニヤ。回復薬は仕事で使うかもしれないからホイホイ使えないニヤ」

「知りませんでした……」

「向こうじゃいっぱい採れたんだけどニヤア……」

生まれた世界を思い出すマツコリ。どちらの世界も一長一短かもしれない。

「こいつらも鍛えてやるかニヤア。そうすればぐっすり眠るだけでどんな怪我でも回復するニヤ」

「そういうものでしょうか？」

「訓練されたハンターは瀕死状態でも眠ればすつきり回復ニヤ」

話している間にすべての猫の治療が終わった。茶々丸がほっとしている、そうマツコリは感じた。

「さて、待っててくれたのはありがたいけど、盗み見ているのは感心しないニヤ」

そう言つと、そろそろと建物の陰からネギとカモ、明日菜が現れた。

「千雨みたいにそんなに勘はよくないけど、それでも長いことじつと見られてたらわかるニヤ」

「……油断しました。マツコリさん、下がってください」

「ずい、とマツコリの前に立つ茶々丸。」

「やい、猫妖精！ てめえなんでエヴァンジェリンのパートナーと一緒に居やがる！」

「まあ、世話になつたからかニヤ？」

いきり立つカモ。しかしマツコリはカモの怯えが見えてとれたのかどこ吹く風だ。

「ええい。兄貴、一緒にやっちまいましょう！」

「で、でもー」

その様子を見てマツコリは、ふうと息をはいた。

「自分でやるわけでもないのに偉そうニヤ。……ネギだったかニヤ？」

「え、はい」

「修業中、だったかニヤ？ 揉んでやるからかかつて来るニヤ」

シャドーをして挑発するマツコリ。するりと茶々丸の前に出る。

「マツコリさん、いけません！」

「兄貴！」

「うっつ、……行きます！ 契約執行十秒間！ ネギの従者」

ネギの呪文はそれ以上紡がれなかった。マツコリは素早く駆け寄り、ネギの肩にいたカモを捕えた。

「カモ君！」

「動くニヤ！」

カモの首に、どこから取り出したのか分からない、小さな刃物を押し当てたマツコリが大声で制止する。

「こいつがどうなってもいいかニヤ？」

「う……カモ君」

カモはぶくぶくと泡を吹いて気絶していた。

「……とまあ、このように人質を取られることもあるニヤ」

ぼい、とカモを放り出して刃物をしまう。

「……え？」

「自分と同じように、相手が卑怯な手段を使うことも考えた方が良いニヤ。……あー、覚悟もニヤいのに戦場に出て来るべきではニヤいとも言っとくニヤ」

ぼかんとする一同。マツコリは四足歩行でタタツ、と駆けて行く。授業料はタダにしとくニヤー！！」

静止した状況からいち早く離脱したのは茶々丸。ついで明日菜が元に戻る。

「ええと、逃げられちゃった。……あ、ネギ、アンタおでこに肉球の跡が！」

「ええ！　もしかしてあの一瞬で付けられたの！？」

何故か人質役になったカモはしばらく忘れられていた。

「ふーん。そんなことがねえ」

「まあ、各個撃破。ちよつと頭使ったのは評価できるかニヤア」  
はて、と千雨は考える。

「オコジヨの入れ知恵じゃないのか」

「あー、そうかニヤ。まあヒトは補い合って生きるものニヤ」  
「そうだな」

## 第8クエスト

長谷川千雨とマツコリは採収ツアーにやってきました。

「アオキノコ発見と。なんだ、山の方に来れば結構あるなあ」

これなら自分たちで使う分量を十分確保できるだろう。

「いっぱい採るニヤ〜」

回復薬、解毒薬は既に十分な量が確保できた。

元の世界と違いがあると困るので、ためにしに猪をぼこぼこにした後飲ませたら普通に効いた。効かずに死んだとしたら、まあ食べることになっただろう。

「それにしても医者が見たらすっ飛ぶような効果だな。これ」

何せ瀕死でも何度か飲ませればあつという間に回復する。何故使われていないのか不思議だ。魔法関係のものなので一般使用されていないのだろうか。

そんなことをつらつらと考えながら採取を続けていたら、あつという間に用意した袋はいっぱいになってしまった。

「これ以上は持って帰れないから帰還するかなあ」

帰り支度を始めたところで、二つの気配に気が付く。覚えのある気配だ。そちらを振り向くと、ちょうどこちらを見ていた長瀬と目があつた。

「長谷川ー！ こんなところで何してるでござるかー!？」

ひよひよいと慣れた様子で近づいてくる長瀬。後ろにはなぜかネギもいた。

「お前こそ何やってんだ。修業でもしてるのか？」

何故か長瀬が答えない。視線の先を見るとマツコリがいた。立っていたのを見てしまったか。

「まあ、いいか。どうせコイツ忍者だし」

「い、いや違うでござるよ」

説得力が全くない。

「長谷川は面妖なネコを連れてここで何を。お主はインドア派ではござらんかったか」

「いろいろあつてな。狩りに目覚めた」

ほほう、と頷く長瀬。

「最近、急に達人の身のこなしになったから驚いていたでござるが……」

やはり歩き方などは変わっていたようだ。戻せと言われても戻す気はないが。

「お主も一緒に修業するでござるか？」

面倒だが、このままだと体がなまってしまつたらう。千雨は長瀬と行動を共にすることを決めた。

「じゃあそうするか。ところで袋とか持ってないか？ 貸してくれるとありがたい」

「一応持つてるでござるが」

もう少し素材集めはできそうだ。

「本気か」

長瀬に模擬戦をしてほしいと言われたため、真面目に問いかける。「本気でござる」

目を見ると、真剣にこちらを見つめていた。この分だと古菲と戦うのもそう遠くはなさそうだ。

「対人戦闘なんてやったことないぞ。加減できるかわからん」

「拙者が手加減される方でござるか。かまわんでござるよ」

ここはひとつ胸を貸してほしいでござる。という言葉聞いて、不安になる千雨。

長瀬の練度は多分高畑より下。一つ加減を間違えばクラスメイトを殺すことになる。

「まあ、回復薬もあるし。何とかなるか」

一撃で胴体真っ二つにしなければの話ではあるが。

千雨が超一流のハンターであった理由の一つにずば抜けた回避力がある。一撃で致命傷となる竜種の攻撃はガードするより回避できるなら回避した方が良い。

その身のこなしは、長瀬が放った苦無も軽く避けてしまった。千雨は苦無が飛んで行った方を見て、考える。

「ここは全部掴んでやった方がよかったか？」

「そんなことされたら、自信なくすござる、よッ！！」

森の中に飛んで行った苦無の回収がめんどくさそうなので聞いてみたのだが、どうやらそんな親切心を出す必要はなかったようだ。

千雨はひよひよいと長瀬の猛攻を避け続ける。

どうやって終わらせるかを考える千雨。使い慣れた太刀は間違いなく長瀬にヤバイレベルの怪我をさせるため、使っていない。

あまり力を入れず、寸止めできるような攻撃を考えたが、そもそも攻撃といえば力いっぱい振り抜くようにしていた千雨は寸止めの経験がない。

そこまで考えて、此方が攻撃を止められないなら、逆転の発想で相手に攻撃を止めてもらうのはどうだろうと考えた。

とりあえず腕をつかんで、真横に投げてみることにした。振り下ろせば地面にぶつかるが、横なら受け身を取ることでもできるだろう。伸びた状態の長瀬の腕に手を伸ばし、軽く手を当て、握る。

「なっ」

振りほどく暇を与えず、ぐるりとハンマーを回すように横に一回転。そのまま勢いよく投げる。気持ち上向きに投げ、体勢を立て直しやすくしてやる。

千雨の思惑通り、長瀬は受け身を取ってすぐさま立ち上がった。

「おーい、こんなもんでいいか」

千雨の言葉に構えを解いて、歩み寄ってきた。

「いやあ、まったくかなわぬでござる。強いでござるなあ」

「ほとんど避けてただけだけどな。まあ、うまく手加減できるようになったらまたやってやるよ」

それまで古菲がこないように上手く止めといてくれ、と頼んでおく千雨であった。

「帰るのでござるか」

「まあ、明日は明日でやりたいこともあるしな」

HPの更新とか写真撮影とか。マツコリという助手も出来たので、今までになかったタイプの写真も撮れるだろう。

ネットアイドルの頂点に立つつもりとかはなくなったが、コスプレは趣味として続けたい。戦う女の子の雰囲気とかもうまく出せるようになってるかもしれないし。

「あ、そうだ。先生、修業の方はどうですか？」

いきなり話を振られたネギが慌てる。

「え、えーと。そのですね」

「まあ、ヤバい状態になったら助けにはいきますから。じゃあそういうことで」

そう言っただけ千雨とマツコリはさっさと山を下りることにした。

「なにしてんだ、神楽坂」

「あ、千雨ちゃん！ えーと、そのね。ネギが」

「先生なら向こうで長瀬と修行中だ。心配はいらねーだろ。それよりお前が遭難しないか心配なんだが」

明日菜は初めてその可能性に気付いたのか、顔を青くした。

「……えーと、案内してくれる？」  
「下山ルートならな。じゃあ行くか」  
「あ、でもエロオコジヨがない」  
「その辺にいねーのか？」  
「ちよっとー！ どこいったのよー！」

## 第9クエスト

学園都市停電の日。千雨は妙な胸騒ぎがしていた。

麻帆良学園都市には巨大な結界が張られており、電力でその結界を維持していると学園長から説明を受けた。

停電時には予備電源に切り替わり、一時的にパワー不足になるために侵入者がその時を狙って侵入して来たり、学園都市内にある呪物が力を増したりと面倒なことが起こりやすいそうだ。

学園長はそれらを予知したのが原因ではないかと楽観していたが、千雨にはそうは思えなかった。

「一応、知っている奴らにも注意しておくか」  
まずは龍宮真名。

ほとんど千雨と同じような立場で魔法協会との関係を築いている彼女は、本来傭兵なのだそうだ。

胸騒ぎの事を伝えておいたら、「戦士の勘は、馬鹿にできないこともあるからね」と言って去って行った。

本気にしてくれたかどうかわからないが、とりあえず注意はしてくれるだろう。

次は桜咲刹那。

何故かこいつは暇さえあれば近衛木乃香の後をつけている。

学園長の話だと木乃香の護衛だそうだが、二、三度、要人の護衛任務をこなしたことがある千雨からすれば、緊急時とつさに動けないような状態で護衛が務まるのだろうか心配だ。

一応そのことも注意しておこう、そう決めて刹那に声をかける。

先に胸騒ぎの事を伝え、ついで護衛の事を話したら急に顔色が変わった。

「事情を知らないのに、簡単に言わないでください」

「確かに事情は知らねーが、ライフフルで狙撃されたらどうする？

突き飛ばしても近衛の命守れるのかよ」

刹那はこれ以上話すことはないといったように、さっさと行ってしまうた。

「なんか機嫌悪くなったニヤ」

「まあ、まだ甘いな。命のやり取りとかしたことはないのかね」

人間とは時に、思わぬ卑怯な手段を平然とやるものである。軽い犯罪の口封じのための殺人など、そういったことはこちらでもよく行われている。

生き延びるために無茶苦茶なこともしてかした千雨は、刹那が動けなかったときの為に、木乃香の事も気にかけてやることにした。無論、そういったことが起きた時は学園長相手に報酬の支払いを要求する気であるが。

そしてネギ先生。

何やら浮かれていて、ちっとも気を引き締める様子が見られなかった。話の途中にはたき倒してやるうかとも思った。

最後にエヴァンジェリン。

「今日、何かまずいことが起きそうな気がするから、気をつけておいてくれ」

今までと同じように注意しておく、何故か雰囲気が変わった。

「なぜそう思う？ 長谷川千雨」

「勘だ。だが、馬鹿にはできねー。何度もこの勘に命を救われたからな」

「……そうか、注意しておいてやるう」

何故だが、にやりと笑って踵を返す。

「アイツ、何かやらかす気だな」

「それも勘かニヤ」

「どつちかというと推測だ。学園長は学園結界が弱まると、中にある悪い感じのものが力を増すとか言ってた。そしてあいつは吸血鬼で、封印されて弱体化している」

多少、封印の力が弱まり、血を吸うこともできるかもしれない。

次の満月まで先生を襲わないと言っていたらしいが、もしかすると

今日行動を起こすかもしれない。

学園結界の予備電源制御システムが何者かにハッキングされて、結界が弱まるのではなく、消えたらしい。

その事実を学園長は千雨の携帯に伝えてきた。ライフラインは別の予備電源を使っているようだ。

魔法先生たちは侵入者排除と電源復旧に大忙し。

「長谷川君も、侵入者の排除に手を貸してくれんかのう」

「はい、分かり……。いえ、先に依頼された仕事を片付けようと思います」

「ふぉ？ ……そうか。君はこの騒ぎに乗じて、エヴァンジェリンが何かしでかすと考えているんじゃない」

「……そうですね」

「あい分かった。ネギ君のことは任せよう」

通話の切れた携帯をしまい、手早く装備を整えて、玄関から外に出る。

それと同時に降ってきた人影に向かって睡眠薬を含む煙幕弾を投げつけた。

煙幕が晴れると、佐々木まき絵が眠りについていたので確認できた。

「なんだ、佐々木か」

千雨達はまき絵を放り出したまま、エヴァンジェリンを止められそうな場所に移動を開始した。

エヴァンジェリンとネギの対決。どうやらそれはエヴァンジェリンの勝利に終わりそうだ。

「でも、あれだニヤ。魔法ってあんな派手に戦うものなのかニヤ？」

「あれで隠してるつもりなのかね」

千雨はエヴァンジェリンに向かって気を込めた弓矢を構える。

「まあ、これで……」

終わり、そう考えたが、何故だか胸騒ぎが収まっていない。

瞬間、覚えのある気配がした。とつさにそちらを見ると、世界樹の上空がゆがんでいた。

「なんだ、あれ……」

空が破れる。穴から出てきたのは何度か戦った相手。大空を舞う、  
白銀の太陽。

「リオレウス希少種……！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2233z/>

---

凄腕ハンター千雨

2011年12月11日11時45分発行